

猪 1 2 昔の狩人 = = = 猪・鹿・狸より

猪の話に直接関係はなかったが、狩人の話のついでに、珍しくもない昔話を一つ付け加える。

ある時、ある処で一人の狩人が、夜業に炉辺で翌日使う鉄砲丸を、茶釜の蓋でせっせと丸めていた。すると向いの炉縁に飼猫がちゃんと坐って、じっと手つきを見ている。丸が一つ出来上がって脇に置くたび、前肢を上げて耳の後ろから前へ一回越させた。翌朝は早く起きて、狩に行こうとして、炉の茶釜の下を焚きつけたが、不思議なことに前夜使ったはずの茶釜の蓋がどうしても見つからない。しかもその朝に限って飼猫の姿が見えなかった。狩人はそのまま支度してまだ暗いうちに家を出た。だんだん山へは行って行くと、行く手の岩の上にある松の大木から、何やら怪しい光がする。さっそく丸込めして一発狙って放したが、いっこう手応えがない。次から次へいくら撃っても手応えがなく、とうとうありったけの丸を使って、最後の一発を放してしまうと、その時初めて何やらちゃりんと金物の落ちた音がした。怪しい光物はまだあるので、今度は別の取って置きの丸を取り出して撃つと、初めて手応えがあった。そこで岩の下へ行って見ると、猫が頭を撃ち抜かれて斃れていた。よくよく見ると朝方見えなかった飼猫であった。しかも傍らには茶釜の蓋が転がっていた。猫が茶釜の蓋を持ち出したのである。そして前夜作った丸だけは防いで、もう用はないと、蓋を捨てたところを一方狩人は別の丸で撃ったのである。別に黄金の丸で撃った話もある。実は何でもない化け猫の話であるが、ただ自分がこの話に興味があるのは、話にもある通り、自分らの記憶にある頃にも、狩人の中には、茶釜の蓋で、鉄砲丸をこしらえていたものがまだあった。型に流しこんだ鉛を短く切って、それを木の根株などでこしらえた頑丈な台の上で、茶釜の蓋で圧えながら、ごろごろ丸薬でも造るようにやっていた、先代からの狩人で、若い頃には背戸の山で猪を撃ったこともあったと言うた。めったに狩に出かけるようなことはなかったが、ただ鑑札だけは毎年受けておくとも言った。平素は農業熱心で、遊ぶことが何より嫌いだと言うたほどの男であった。それがどうかすると、ぶらりと鉄砲を舁いで山へ出掛けたのである。そうして一日山を歩いて来れば気が済んだそうである。

この男などのやっていた服装が、やはり昔の狩人そのままであった。鹿皮のタツケを穿き、背に木綿のイジコ袋を負って、腰に昔風の山刀を帯んでいた。さすがにもう藁の舟底などは被らなんだが、火縄は持っていた。他の専門の狩人は服装などもだんだん新しくなって行ったが、年に一度か二度しか出ぬために、昔のままのものが、そっくり無事でいたのである。そのために、そんな大時代の風をして狩にも出たのである。実は狩とは言い条気晴らしに行ったのだ

から、道具などは何でも構わなかった点もある。

自分の家などにも、火縄銃が一挺あって、別に粗末な鞘に納めた山刀も一振りあった。やはり祖父の代までは、時として気晴らしに山へ行くこともあったそうである。